

優秀賞

## 私が進む道の覚悟

京都女子大学 発達教育学部 4年 川村 菜月

私は、特別支援学校の教員になると九歳で決意した。私の姉には知的障害があり特別支援学校に通っていたため刺激を受けたのだ。幼い頃から多くの障害のある人と関わってきた。障害をもって生きている人たちの苦勞を身近で見えたため、本人が持つ最大限の力を引き伸ばしたいと思っていた。現実では理不尽なことは多いけれど、私は障害のある人たちのため明るい未来をつくる一助になりたいと強く願っていた。そんなある日、悲しい出来事が起こった。私のいとこの持病が悪化したのだ。いとこは病気のため車椅子状態になり普通の学校から特別支援学校に転校した。当時の私は健康なときのいとこを思い出しては涙を流していたが、車椅子に乗るいとこを次第に受け入れられるようになった。しかし雪がしんと降り朝、事態が急変した。いとこが突然息を引取ったのだ。享年十八歳だった。いくらなんでも十八歳で亡くなるのは若すぎやしないかと神様をひたすら恨んだ。淡々といとこの葬儀が行われる中、私は現実を受け入れられずにいた。葬儀には、いとこが通っていた特別支援学校の担任の先生が参列していた。担任の先生は安らかに眠るいとこを見て苦しそうに泣いていた。その姿を見て、私は初めて特別支援学校教員の重みを知った。いとこのように生徒が命の灯火を絶やすまで懸命に生きている時間、誰よりも近くで共に過ごすのは特別支援学校教員だ。かつての私はそんな事を考えず軽い気持ちで憧れを抱いていた。そんな自分を初めて恥じた。それから私は覚悟を持って特別支援学校教員を目指すことにした。中途半端な気持ちで教員になることは懸命に生きる生徒に対して失礼だと思ったからだ。私は大学で教員になる為に教育学を勉強した後、大学院に進んで障害学の勉強をする。私は絶対にいとこの死を忘れない。これから私が進む道は激動かもしれないが、私は障害のある人たちのために少しでも助けになりたいと思っている。